第１回　石狩川流域生態系ネットワーク推進協議会
議事要旨

〔日　時〕: 令和６年２月７日（水）　15:00～16:30
〔場　所〕: アスティ 45　４階　アスティホール
〔出席者〕: 委員 67 名（Web 出席含む）

（１）設立趣旨（案）、規約（案）について

・事務局より、資料１、資料２の説明。
　〇設立趣旨（案）および規約（案）が承認され、協議会が設立された。
・会長の選出
　〇北海道大学大学院 農学研究院 教授の中村委員が推薦され、会長に選出された。

会長　今回は流域 46 市町村、関係機関など多くの皆様にご参加いただき感謝する。石狩川流域の様々な生態系をふまえて大きなネットワークを形成できれば良いとかねがね思っていた。具体的な取組が重要であるので、委員の知恵と力をお借りしたい。

（２）基調講演

・講演１「石狩川流域生態系ネットワークへの期待」
　北海道大学大学院 農学研究院　中村 太士 教授
・講演２「流域治水と地域活性化」
　滋賀県立大学 環境科学部　瀧 健太郎 教授

（３）石狩川流域における生態系ネットワークの推進について

・事務局より、資料３の説明。

会長　具体的にどのように取組を進めていくかが重要であり、地域ごとの重要な生態系やシンボル種ごとにグループ化しながら議論する場が持たれるということである。委員からご意見等いただきたい。

委員　タンチョウは道東に多く生息しているが近年個体数が回復し、2000 年代から道北へ、2010 年代から道央へ生息範囲が広がってきている。繁殖するような状況が確認された場合、その情報を非公開とすることは弊害が大きく、自治体にはタンチョウの飛来・繁殖に係る情報を公開することを基本とした対応を願いたい。ただし、情報公開の前提条件として、市民の意識や体制が重要。

委員　町にタンチョウを呼び戻す取組は、「舞鶴遊水地にタンチョウを呼び戻す会」メンバーにとっても遠い将来の目標であったが、奇跡的に実現した。町民の理解は徐々に広がっているが、現在も様々な意見がある。タンチョウの飛来により、町民の活動も活発になり、多くの企業にも協力をいただいている。自然環境保全の重要性は高まっており、今後も経済面での可能性も探りながら取り組んで参りたい。

委員　イトウの生息地として、朱鞠内湖の地元漁協を中心に環境整備等を行っている。周辺には北海道大学の演習林があり、クラウドファンディングも活用しながらイトウを守るための現地整備を行った。本協議会への参加を契機に、他地域の事例も参考にしながら取組を進めて参りたい。

委員　サケは資源量の減少が指摘されている。放流事業も積極的に行っているが、自然産卵するサケの価値が見直されている。人為でなく自然の営力によってサケが増加することが大きな利点であり、野生サケの保全が資源増殖上も非常に有利と考えられている。明治初期の石狩川には、現在残る記録で 300 万匹のサケが遡上していたが、現在の全道での遡上数に匹敵する。石狩川はそれだけのポテンシャルがある。サケをシンボルとした石狩川水系の生態系ネットワークの再生が、産業や地域の営みの推進にも有効ではないか。協議会委員の協働により取組が進んで行ければ良い。

委員　生態系ネットワークは非常に重要であり、湿地の活用・保全・再生も非常に重要だが、認知度が低いことが課題。そこで、湿地の植物の試食やしめ縄・ゴザ作り体験等により多くの人に湿地の楽しさを知ってもらうことで、観光サービスやコミュニティ作りに繋げる活動を行っている。今回の協議会でこれだけの自治体の方が関わっているので、協力・協働しながら、良い環境づくりや産業に波及していくことを期待している。

会長　今回の協議会は立ち上げということで、今後より具体的な議論を進めていきたい。